

<書評>マーク・R・マリンス編『日本のキリスト教 解釈・分析・批判論集』

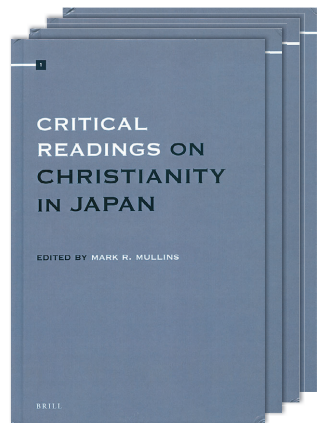
著者	松岡 史孝
雑誌名	日本研究
巻	56
ページ	234-237
発行年	2017-10-20
その他の言語のタイトル	Mark R. Mullins, ed., Critical Readings in Christianity in Japan, 4 vols. Leiden: Brill, 2015.
URL	http://doi.org/10.15055/00006800

マーク・R・マリンス編

『日本のキリスト教——解釈・分析・批判論集』

Mark R. Mullins, ed., *Critical Readings on Christianity in Japan*, 4 vols.
Leiden: Brill, 2015.

松岡史孝



社会、文化、宗教、政治、文学の複雑なモザイクの入り組む日本を対象に、歴史的な広がりや豊かな奥行きを犠牲にすることなく、この国のキリスト教を概観できる入門書を、とりわけ英語で書くことが、どうしても可能だろうか。どのような観点から、明示的あるいは暗示的に、そうした本が書けるだろうか。そのような概説書が学術的信頼性と誠実さをもつて、「インサイダー」のみならず外部研究者の興味にも訴えることが、どうすれば可能だろうか。全四巻からなるこのプロジェクトは、日本のキリスト教をめぐるところとした重要問題や疑問に説得力をもつて答えてくれる。統括編集者のマーク・R・マリンス教授は現在ニュージーランド、オークランド大学の日本研究センター所長である。教授は自身が

「インサイダーとアウトサイダー」の狭間に生きた経験を通じて、また、この日本のキリスト教というテーマを「聖典や教会制度を超えた多次元的な現象」(p. 3) 以下、全巻通した頁番号で示す)ととらえて、この編集事業に取り組んだ。本作にとりかかる以前、教授は四国学院大学、明治学院大学、上智大学で教えたほか、上智大学が発行する英語の日本研究専門誌『モニュメンタ・ニッポニカ (Monumenta Nipponica)』の編集にもたずさわっている。

四巻にわたるこの膨大な仕事の特徴を語る一つの方法は、これを十六世紀、フランシスコ・ザビエルの鹿児島上陸とともに始まった日本のキリスト教について交わされる歴史の会話、今なお続き、これからも続くであろう会話ととらえることだ。この会話

は豊かにして複雑、時として異論や矛盾を孕みながらも、個々人の営為、努力を超えて共有される一筋の糸の存在を物語ってくれる。読者が単に受動的な見物人としてだけでなく、能動的なパートナーとしてこの会話に加わるならば、いまだ完結に至らぬ色鮮やかなタペストリーを織り上げる作業に貢献できるだろう。このタペストリーのことを良く知る読者は、本作を通じて日本のキリスト教に関する視野をさらに広げることができ、それによって、良く知るがゆえにともすれば陥りがちな視野狭窄の限界を打ち破ることができるだろう。外部者として日本のキリスト教史を研究しようとする者にとっては、体感として馴染みながらも、はつきり特定できない暗黙の了解じみた自身のキリスト教理解に対して、本作は違和感をもつて立ちはだかるかもしれない。そのいずれであつても、本作は生きたキリスト教の歴史と現状についての刺激的な入門書になるだろう。

本作は最近の学際的アプローチにより、まず近世日本のキリスト教を時系列的に追い、次いで大日本帝国時代のキリスト教を扱う。第三巻と第四巻は、それぞれ「近代日本キリスト教の文化的、社会的諸相」、「戦後期および現代日本のキリスト教」と、テーマが絞られる。構成は概ねキリスト教の歴史的進展に沿ってはいものの、解釈に関わる叙述が論文ごとに相互関連しながら全巻いたるところに配置されているので、読者はそれぞれの研究の関心

事に従つて、あちこちに散りばめられたテーマ、解釈、洞察をクロスチェックするといよい。例えば「キリスト教の世紀」と題されたセクション（第一巻）では次のような問題が扱われている。

●キリスト教が日本に導入された当時の複雑な歴史環境、とりわけ国家建設の政治学に対する仏教の役割、国際情勢の知識、通商など。キリスト教史をめぐって互いに絡みあうこれらの要素は、新しい国家の出現についての考察とバランスをとる必要がある。

●キリスト教の導入と日本の国際化は関連している。

●日本の社会や文化を「泥沼」になぞらえた遠藤周作への反論は重要。

●「隠れキリシタン」は「敬虔な」信徒集団であるという、一般に膾炙した従来の定説に論駁することで、文脈に即した解釈が可能である。

●ヨーロッパ人による宣教活動の底流にある人種主義的、植民地主義的意味合いは、キリスト教の導入と布教に対して日本政府がとった人種主義的で強圧的な対応と併置されねばならない。

こうした問題を、「隠れ」共同体の組織およびカトリック教との

関係」(p.48)や「土着化(インカルチュレーション)」とグローバリゼーションのはざま——現代の日本社会におけるカトリック教の状況」(p.56)などの論文と照らし合わせると、「隠れキリシタン」というものが非常に理解しやすくなる。とくに重要なのは、「現代の「隠れ」共同体内で」洗礼が生き残っていることから、「隠れ」信仰の少なくとも一面は、祖先たちが行なっていたカトリックの秘蹟から直接受け継がれたものであることがわかる」(pp.1170-71)が、「その洗礼の伝統はカトリックへの入信ではなく、「隠れ」信仰への入信の印と見なされるべきである」(p.1171)という考察だ。これぞまさに「土着化」ではないか。

同様の考え方から、この大作の一つ一つの論文の持つ重みと深みを真に理解するためには、関連するテーマを扱った他の論文に立ち戻り、多元的に認識することをお勧めする。例えば第三巻第六部の「日本のキリスト教徒、ナシヨナリズム、国家」および第七部「占領期の展開」所収の諸論文を読むとき、カトリックと日本の伝統との出会いや、大日本帝国のキリスト教を扱った既出版分を読み返してみると、理解は大いに進むだろう。「暗い谷間の彼方に——一九三九年の宗教団体法に対するキリスト教側の反応を再解釈する」の著者は、「キリスト教側はすでに、この国で一九三〇年代初めから始まっていた政治的変化と、大幅に折り合うつもりでいた」(p.953)と述べている。この論文を第一巻所収

のもう一つの論文「信仰を守る——幕藩体制による十七世紀日本の宗教政策」と読み比べて、より大きな歴史的文脈に位置づけてみると、キリスト教教会と日本国家の関係が形成されたダイナミックな過程がよくわかるだろう。これは本作で扱われる他のテーマにも通じる。

マリンズ教授は、日本のキリスト教研究においてこれまで欠落してきた女性の存在についてとくに留意しており、本作では(とくに近年のテレビドラマによって知られるようになった)十六世紀の細川ガラシャ夫人のように有名な人物のほかに、あまり知られていないが重要な詩人で思想家の只野真葛が紹介されている。真葛がキリスト教を植民地化の道具と考えて批判的だったと同時に、その貢献も評価していることは重要である。ここでも同様に、日本のキリスト教史における女性の役割についてその全体像を知るためには、本作の他の論文を参照することが必要だ。第一巻所収の「近世日本のキリスト教尼僧たち」を読むと、第三巻所収の「日本のキリスト教と男女関係」、「売春撲滅への聖戦」、「田村直臣の『日本の花嫁』」などがより良く理解できる。これらすべての論考を通じて、「男女間の社会的相互作用を見つめ、実践する機会」(p.66)にキリスト教が貢献し、家庭は「近代日本の新しい国民国家の基礎」(p.83)だったことがわかる。第四巻所収の「日本のキリスト教と女性」という論文は、女性の役割とキリスト教を

めぐる歴史の会話を締めくくるものになっている。

第二次大戦後、論争を重ねつつも急激な変化の途をたどったキリスト教のことは多くの人の知るところだが、「土着化とグローバリゼーションのあいだで」と「日本のキリスト教の世俗化理論」という二つの論考には啓発される。前者はカトリック教会の、後者はプロテスタントの日本基督教団の現状について述べている。いずれの場合も、日本のキリスト教教会の変貌に重要な役割を果たしたのは文化的要素と人口統計的要因だった。しかし、注目すべきはこの二つの教会の違いである。カトリック教会が「多くの面で現地の文脈に適応し、今日では明らかに日本社会に対して寛大で寛容な姿勢をとっている」(p.1185)のに対し、プロテスタント教会の方はかなり複雑だ。「一つにはキリスト教と社会的権威との関係、もう一つにはキリスト教と政治の関係」(p.1125)が、一九六〇年代と七〇年代の日本基督教団に亀裂と対抗力学とをもたらした。この論文は戦後の教団の状況を「世俗化」の限定的表現に帰しているが、「世俗化は宗教利権の衰退なのか再編なのか」(p.1128)という論者の問いに回答はないままである。

この包括的なプロジェクトの成果を全巻読んでいて気づくのは、所収論文の質にムラがあることだ。それは、これらの論文がすべて他の出版物にいったん掲載され、このプロジェクトのために後から選り出されたものだからなのかもしれない。もう一つ気づく

のは、すべての論文が果して最初から英語で書かれたものなのか、それともまず日本語で書かれ、後から英訳されたものもあるのかという点だ。またつけ加えるなら、寄稿者紹介があればなお良かったと思う。

本作がとりわけユニークで説得力を持つのは、第四巻がキリスト教の信仰と文学というテーマで締めくくられている点だ。このエンディング部分は信仰と文学を一つのジャンルとしてとりあげるばかりか、まるで礼拝の最終儀式のごとく全巻を一体感で包みこみ、読者はキリスト教が現代日本人の暮らしの中でいかに体現されているかを垣間見ることが出来る。この点につき、ある一人の著者は最も肝心なこととして、次のように述べた。

……聖なるものを探りあてるには、それを魂の最も奥まった闇からはとばしり出る光としてとらえること、そして文学を創造する者は「人の内なる生きた混沌」に目を凝らし、それを「生きた人間」の創造の定式とすべきである……(p.1360)

この言葉にあるように、本書は日本のキリスト教について学術的理解を超え、きわめて「神学的」な言辞で読者の心に語りかけてくる。信仰は理解を求めるとは、まさにこのことだろう。

(翻訳：朝倉和子 翻訳家「SWET所属」)